

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00755

研究課題名(和文) アクティブラーニングからグローバル人材育成への授業展開研究

研究課題名(英文) Research into the Development of Global Human Resources through Active Learning.

研究代表者

加藤 和美 (Kazumi, Kato)

東海大学・語学教育センター英語部門・准教授

研究者番号：60631801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は「教室内のみで行われたグループ活動を、ICTを利用して海外の学生とグループ活動を共同で行い、学習者のグローバル人材育成を行う」ことである。研究1年目、2年目はシンガポール、3年目はタイの大学生とオンラインで共同授業を行った。本研究者が作成した教材と教授法を利用して実際にグループ活動を行いその様子を観察した。録画した動画の分析とアンケートの結果、日本人学生の発言率が高くなるだけでなく日本人学生がグループ活動をリードする側に回ることが可能であることがわかった。その理由として、シンガポールの学生たちの方略的能力の高さや、タイの学生と日本人学生の英語に対する苦手意識への共感が挙げられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外とオンライン共同授業を行う際に、交流する国は英語母語話者を対象にする傾向がある。しかし、アジア圏のさまざまな国の大学と共同授業をすることで、異なるアクセントに触れることができるだけでなく、その国独特の文化や日常生活での英語使用の頻度も知ることができる。その結果、日本人学生は交流相手国の特徴を捉えながらその攻略法を考え、コミュニケーション能力のうち方略的能力が養われると考える。したがって、英語母語話者だけでなく、第二外国語として英語を利用する国や、日本と同じように外国語として英語を使う国の学生とオンラインでグループ活動を繰り返し行い、よりグローバルな人材育成をしていく必要があると考える。

研究成果の概要(英文)：This research aims to develop Japanese students' strategic competence (SC) in collaborative exercises with students in Asian universities via online lessons. Japanese students undertook group discussion with their classmates, then tried the same discussion with Singaporean or Thai students using ICT. Observing those students, the percentage of Japanese student comments was higher than that of the other two groups. This was due in part to Singaporean students having high SC and employing turn-taking, so Japanese students had more chances to speak. In contrast, Thai students, similar to Japanese, are not confident in English, so Japanese students found that they had to lead group work. Japanese students analyzed the Thai students' discussion video before the collaborative lessons, and then exhibited SC in the group discussion. From these results, it can be deduced that the Japanese students improved SC with Asian students by analyzing collaborative group discussions.

研究分野：英語教育学

キーワード：異文化コミュニケーション 英語教育学 ICT グループ活動 アクティブラーニング オンライン共同授業

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

高等学校新学習要領の改訂に伴い、外国語科では、「授業は英語で行うことを基本とする」こととなった。本研究者は、2012年よりグループ活動を英語で行うための中間言語語用論研究を行ってきた。実際にイギリスの大学を訪れ、現地の学生のグループ活動の様子をビデオで撮影し、そのビデオデータを利用してグループ活動のためのモデル動画教材を作成した。さらに、中間言語語用論研究をもとに、語用論的能力と言語習得を促進させるための指導図を作成し、5回で完結する「グループ活動のための指導方法」を開発した。そして、作成したビデオ教材と指導方法を大学と高校にて実践した。これまでの研究では、Bachman & Palmer (1996) のコミュニケーション能力の構成要素(1)言語能力、(2)方略的能力、(3)精神生理学的作用のうち、(1)言語能力の「知識」を得るための教材と教授法の研究をしてきたが、本研究では、言語能力とは独立した構成要素の(2)方略的能力に注目し、言語などの「知識」習得だけではなく、実際にグループ活動を円滑に遂行する方略的能力を研究するに至った。

2. 研究の目的

本研究では、ICTを利用して実際に海外の学生と共同でグループ活動を行い、その様子をビデオ録画により方略的能力の習得を観察する。学習者は教室内でアクティブラーニングを通して言語能力の「知識」を学習した後、今度は実際に海外の学生とインターネットをつないで異文化間でグループ活動を行う。言語能力だけでなく、方略的能力を検証することによりグローバルな人材育成のための授業を構築することができるのではないかと考えた。

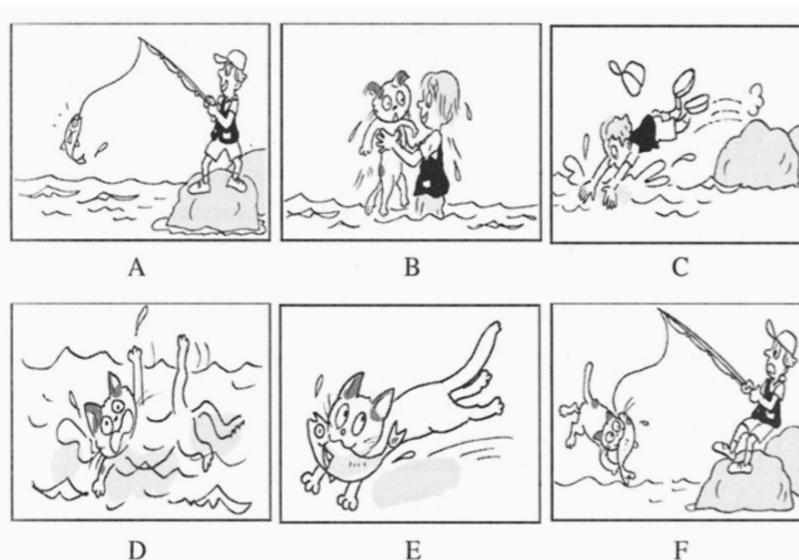
3. 研究の方法

研究1年目2年目は、シンガポールの学生とオンラインで合同授業ができるように環境を整えた。シンガポールの大学教員と打ち合わせを行い、ネットを繋げる時間を調整し、研究1年目からオンラインによる共同授業を試すことができた。そして、グループ活動の様子を分析した(4. 研究の成果参照)。また、シンガポールの学生の英語の聞き取りが難しいことがわかったため、研究2年目は、シンガポールの大学を訪問し打ち合わせをする際にシンガポールの大学生のグループ活動の様子を録画をお願いし、そのデータを利用してシンガポールの学生の英語を分析するための動画教材を作成した。また、同年に国際学会にて研究1年目の研究成果を発表し、さらなる共同研究者を募った。研究3年目はタイの大学を訪問し、タイの大学生がグループ活動をする様子をビデオカメラで録画した。これらの録画データを利用して動画教材とその教材を利用した教授法を新たに作成した。教授法を改良して、国際共同タスク活動とし、最終的にタイの大学と共同授業を3回行った。実際に共同授業の様子をzoomの録画機能で録画してアンケートとビデオ観察にて学生の方略的能力を分析した。

3.1 タスクと動画教材

本研究では Picture story のタスクを利用した。このタスクは、三浦(2009)が『ヒューマンな英語教育がしたい!』の本の中で紹介しているタスクで、6つの絵(図1)から4つを選んで英語で自由にストーリーを作成するタスクである。個人でストーリーを作成したのち、グループ内でそれらの作品を紹介、話し合い、グループで1つの作品を完成させる作品完成型タスクである。

図1 Picture Story (6つの絵)

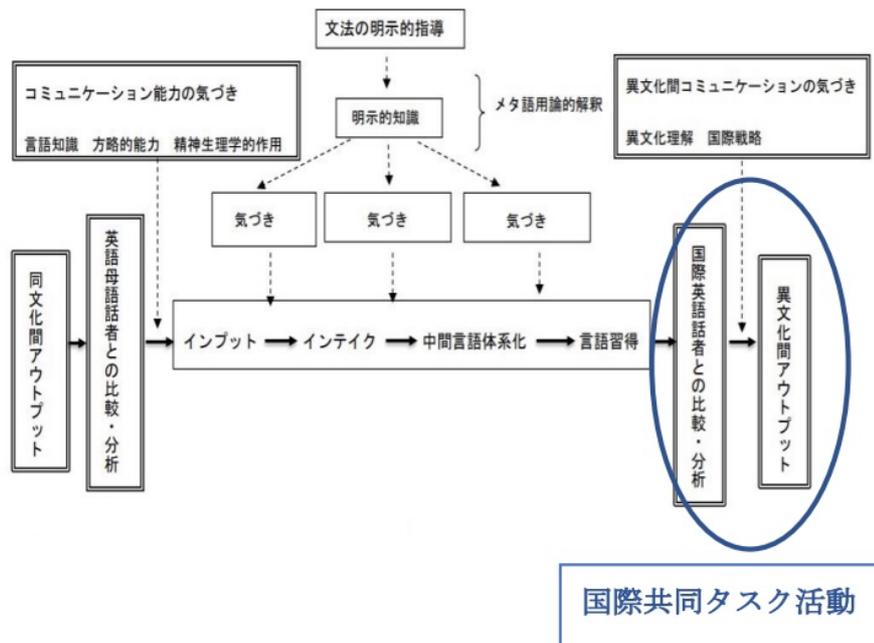


このタスクをシンガポールの学生同士で行ってもらった。その後、オンライン上でデータを受け取り、そのデータを元にシンガポールの学生のグループ活動の様子を動画教材を作成した。また、研究2年目はタイの大学を訪問し、タイの学生同士のグループ活動の様子をビデオカメラで撮影し、シンガポールと同じく、タイの学生のビデオ教材を作成した。ビデオ撮影の際にはシンガポール、タイの学生どちらも同意書に署名していただき研究を行った。

3. 2 教授法

本研究者はこれまでに日本人同士が英語でグループ活動を円滑に遂行できるように、「グループ活動のための指導」を作成し、授業実践をしてきた。学生はまず同文化間でグループ活動を行い、英語母語話者のモデルとなる動画教材を繰り返し視聴して、自らのグループ活動と比較・分析したのち、必要とされる英語表現をインプットして学習者の言語能力を養ってきた。本研究では、習得した言語能力を利用して実際に海外の大学生とタスクを行うことを目的としている。Picture Story のタスクを使い、今までの指導方法に「国際英語話者との比較・分析」を追加し、「国際共同タスク活動のための指導」を改めて作成した（図2）。実際にオンラインで共同授業をする国の大学生の動画を事前に分析するところに特徴がある。第二外国語として英語を話すシンガポールの学生、または日本と同じように外国語として英語を話すタイの学生の動画教材を分析し、攻略法を考えることで方略的能力を養うことができると考えた。

図2：国際共同タスク活動のための指導



4. 研究成果

4.1 シンガポールの大学との共同授業

研究1年目の2018年度はシンガポールの大学教員と打ち合わせを行い、ネットを繋げる時間帯を決めて半期に2回インターネットを通じて共同授業を実施することができた。まず日本人学生は事前にPicture Storyを使って、「グループ活動のための特別授業」を行った。同文化間でグループ活動の練習を行った後、シンガポールの学生たちとオンラインで共同授業を行った。1回目の共同授業では、オンライン上で日本人学生2名、シンガポールの学生2名合計4名1組のグループを8組作り、日本の学生は2名で1つのiPadを利用し、スカイプを通して自己紹介を行った。2回目の授業で実際にグループ活動を行った。実際の交流の様子のビデオを観察すると、グループ内の日本人学生の発話量はシンガポールの学生よりも多かったことがわかった。また、日本人学生の英語習得レベル別にグループを観察してみると、レベルが低い学生の方がより発話が多いことがわかった（表1, B）

表1 シンガポールの学生と日本人の学生の発話量の比較

日本	シンガポール	観察
A (高) 72%	28%	日本人同士が日本語で文法を確認することが多い。シンガポールの学生は日本人の発話の機会を遮らず待ってくれる傾向がある。
B (低) 62%	38%	単語だけでも積極的に話そうとする。シンガポールの学生は聞くに徹する

(高) 英語習得レベルが高いグループ

(低) 英語習得レベルが低いグループ

この結果は、シンガポールの学生は日本人が積極的に話そうとする姿を見ると聞く側に徹し、理解しようとしてくれた点が大きい。また、英語習得レベルが高い日本人学生は、日本人同士で文法の確認をしてしまう傾向があるため、英語習得レベルの低い学生の方が英語での発話が多く見られる結果となった。

研究1年目からオンラインによる共同授業を実施することができたため、研究2年目は研究結果を考慮してシンガポールの学生の動画教材作成し、教授法を改良した。事前に日本人学生が動画教材を分析する授業を行った。しかし、学生は事前準備をして国際共同タスクに臨んでいたがシンガポールの大学と予定が合わず、最終的に海外の学生と実践することができなかった。そのため改良した教授法による方略的能力の成果が確認できなかった。そのため他の国との交流も視野に入れ、タイ TESOL 国際学会で発表を行いさらなる共同研究者を募った。その結果、タイ王国の大学教員、メキシコ、ポーランドの大学教員から賛同いただくことができた。国際学会はタイで行われたため、早速大学を訪問し、タイの学生のグループ活動の様子をビデオカメラで撮影することができた。その結果、研究2年目は新しい教授法と、2つ目の動画教材を作成することができた。研究3年目はコロナ禍になり、再びシンガポールの大学と調整がつかなくなったため、タイの大学教員と共同研究をすることになった。

4. 2 タイ王国の大学との共同授業

コロナの影響で授業は日本もタイもオンラインの zoom を利用していたため、スカイプから zoom に変えて共同授業を行った。まず、日本人の学生とタイの学生の人数が合わないため、日本側は2コマに渡って調整した。月曜日1時間目と2時間目を繋ぎ、合計28名の日本人学生が共同授業に参加した。タイの学生は1クラス40名以上いるため、日本人は2回グループ活動を行うことで調整した。日本人タイ人それぞれ2、3名ずつで合わせて合計4、5名のグループを14グループ作成した。

このような状況で3週にわたって3回共同授業を行った。1回目は顔合わせ、2回目にグループ活動、3回目に再度グループ活動を行った。日本人学生が主体となって zoom を開き、交流の様子を録画した。日本側は週に2回英語授業があるため、共同授業の後に十分にフィードバックをする時間を取ることができた。1回目のシンガポールの学生との交流会後に、録画したビデオを鑑賞しながらフィードバックを行い第2回目に臨んだ。また、第2回、3回のグループ活動の後には学生自身で全ての会話を書き起こし、自分が発言した部分を色分けして一目で発話の量が見えるように工夫した。これらの動画データと書き起こしデータ、アンケートから次のことがわかった。まず、シンガポールの学生を相手にしたグループ活動と同様に、日本人の発話が全体的に多いことがわかった。また、学生のアンケートや実戦後のインタビューによると、「タイの学生の英語は発音がわからない」、「最初は全くわからなかった英語がビデオ分析と書き起こしでなんとなくわかるようになった」、「実際に話をしているときには何を言っているかわからなかったけど書き起こしをして意味がわかった」、「2回目は慣れた」、など、実戦の回数を重ねることで耳が慣れていくことがわかる。動画を観察しても、1回目のグループ活動ではほとんど発言できなかった学生が2回目、3回目のグループ活動で発言ができるようになっていくことも確認できたため、フィードバックを重ねることで方略的能力が上がったことがわかった。さらに、今回のタイの学生とのグループ活動は、シンガポールの学生とのグループ活動と大きく異なる点があった。タイの学生からのフィードバックによると、タイの学生は日本人との英語コミュニケーションが怖いとの感想が多かった。タイも日本も同じく英語使用の機会がなく、英語は外国語として学習している。そのため、共同授業をする前にどれだけ事前情報や英語使用をしてきたかが大きく影響していると考えられる。実際に日本人学生は、毎回フィードバックを行い、分析をしてきたため、次はもっとこうしたい、この表現を使ってみたい、などモチベーションに繋がったと考えられる。

5. 考察

本研究の3年間を通して、2つの動画教材を作成し、その動画教材を利用して教授法を改良した。また、ホームページを作成してハンドアウトをダウンロードできるようにした。授業では、日本人学生はグループ活動をまずは日本人同士で行ったあとにシンガポールの大学生またはタイの大学生のグループ活動の様子の動画を分析して国際共同タスク活動の事前準備を行った。そして、実際にシンガポールとタイの大学生とオンラインでグループ活動を行った。さらに、国際共同タスク活動を行った後に動画を分析するフィードバックを繰り返した。アンケート、観察の結果、方略的能力が養える傾向にあることがわかった。日本人学生からは、タイ、シンガポールの学生たちの英語は聞き取りにくいという感想が多かった。しかし、聞き取りが難しいと感じる一方で日本人の発話量はシンガポールの学生に対しても、タイの学生に対しても多い。発話量が多い理由はシンガポール、タイそれぞれの交流相手によって異なるが、英語母語話者でない国の学生との交流は日本人学生がリードする側に回ることができることがわかった。感想の中には、「もう一度やりたい」、「もっといろんな国の人と話をしたい」、などが多かったことから、事前準備をしてから実践し、ビデオ分析をしながらフィードバックを繰り返す授業方法はモチベーションをあげる効果があると考えられる。本研究者の教材と教授法を利用して今後も多くの国の学生とグループ活動を行い、グローバル人材育成へと繋げる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kato Kazumi	4. 巻 2018
2. 論文標題 Task-based Methods and iPad Materials for Active Learning	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JALT2018 Diversity and Inclusion	6. 最初と最後の頁 369 ~ 369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTPCP2018-49	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤和美	4. 巻 未
2. 論文標題 グループ活動における交流国との方略的能力の比較分析と今後の授業形態の展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JACET International Convention Proceedings 2021	6. 最初と最後の頁 未
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件/うち国際学会 10件）

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 A Task Based Group Project with students in Japan and Singapore
3. 学会等名 40th Thailand TESOL & PAC international conference 2020 Harmony in diversity: ELT in Transcultural society (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 JALT 2019 Professional Development Workshops - Get Involved in Professional Development
3. 学会等名 JALT 2019 Teacher efficacy, learner agency conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤和美
2. 発表標題 日本の教室で英語によるグループワークを可能にするための取り組み
3. 学会等名 ヒューマンスティック英語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 Using Video and Skype for Task-Based Learning
3. 学会等名 JALT Pan SIG 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 A Corpus to Promote Fluency in Group Discussions
3. 学会等名 JALT Pang SIG 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 A Method for Pairing Authentic Materials and Technology to Teach English Discussion Skills
3. 学会等名 SEAMEO, TESOL (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤和美
2. 発表標題 ICTを利用した英語グループ活動の授業
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 Methods and iPad Materials for Pragmatic Awareness
3. 学会等名 44th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 A Methodology for Task-based Group Discussion in Writing Classes
3. 学会等名 15th Annual Cam TESOL Conference on English Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 Introduction of iPad Video Materials and Methods for Task-Based Group Discussion in English
3. 学会等名 JALT Gifu Chapter (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Kato
2. 発表標題 Integration of Non-Textbook Tools into the Classroom: What Do You Use? How Do You Use it?
3. 学会等名 JALT Pan SIG 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤和美
2. 発表標題 グループ活動における交流国との方略的能力の比較分析と今後の授業形態の展望
3. 学会等名 JACET 60th Commemorative International Convention (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
シンガポール	Ngee Ann Polytechnic School			
タイ	Suranaree University Of Technolog			